

### 中国農村調査に おける二つの壁

筆者は中国農村を主なフィールドとして調査研究を行っている。自身の経験と他の農村研究者の話から判断する限り、中国農村はいろいろな意味でハードルが高いフィールドのようだ。本稿では中国農村で調査者の前に次々に立ちはだかる「壁」をキーワードに、最近の事情をで紹介したい。本稿は筆者の限られた経験と知識に基づくものに過ぎないが、ここ数年の試行錯誤から得られた教訓が今後農村調査を実施する研究者のために少しでも参考になれば幸いである。

#### ●その一 制度の壁

中国では外国人による本格的な農村調査は原則禁止されている。これが最初に突きあたった「制度の壁」である。以前に比べて格段に緩やかになったとはいえ中国での外国人の活動は厳しく

制限されており、共同研究事業や人からの紹介無しには調査は不可能である。実際外国人による調査活動が警察沙汰に発展した例は、筆者の知り合いを含め過去に何件も存在する。個人間の関係が重視される中国社会では、農村基層幹部、村民など被調査者の一番の関心事は訪問者が自分とどのような関係の人物の紹介で来たか、自分にどんな利益・不利益をもたらしているか、である。訪問者の日本での肩書



写真1：調査員による農家調査風景（2011年8月、雲南省紅河州八二族自治州）

きや所属組織はあまり意味を持たない。中国では拡大する農工間格差を背景に農村問題は敏感な政治問題であり、特に行政組織では実情を外部に公開することが自らの政治的立場を危うくする危険性があると警戒する関係者は多い。学術調査が相手にとって単なる厄介事であると肝に命じ、たとえ調査が順調に進まなくても強引な態度や勝手な行動を慎まなければならぬ。さもなければ、フィールドへの入り口は閉ざされてしまう。

農村フィールドワークと一口に言っても、目的によって調査対象や方法が異なる。農村の末端レベルで行う調査は、①定量的な大規模調査、②定性的な聞き取り調査、に大別できる。①は前述の制度的な理由に加え一定のまとまった資金と人員を投入する必要があるため、一般的に現地の研究機関との共同研究の形式をとる。この方法では共同研究機関を通して正式に調査地政府の調査許可を取得できるため、調査の手配など様々な便宜を図ってもらえる。農村に信頼できる調査ネットワークを持ち、共同研究の経験が豊富で研

究の趣旨や調査手法に理解を示してくれる共同研究者を見つけることが重要である。

②は、知人の紹介で個人的に調査地のキーパーソンに接触する方法である。特定地域に滞在または通うことで詳細な情報を得たい時に有効である。①と比べて費用は少なく済み、良い関係を築けば長期的に定点観測を行える可能性がある。ただし、調査対象が協力者の人脈の範囲内に限られ政府を通じた場合のような（モデルケースの紹介に偏りがちにしろ）網羅的な調査手配が難しい、比較的高度な中国語能力を必要とする、などの困難がある。滞在型調査については農村社会学者・田原史起先生の体験記「中国の村を歩く」（『国際問題』No.五八一、二〇〇九年）が大変面白い。

筆者は前記二種類の調査を組み合わせることでより良く中国農村の実態を理解できると考えるが、自分の苦い経験からもまずは①に参加し、ある程度人的ネットワークができてから②に挑戦することをお勧めする。

## ●その二 社交の壁

農村に入ることができたら、調査を順調に進めるために関係者と良好な人間関係を築きたい。中国社会では、人間関係の疎密が仕事の成否に与える影響が大きい。「入郷随俗(郷に入つては郷に従え)」という慣用句の通り、現地の文化・習慣を尊重することで関係者との心理的な距離が縮まるのは事実である。調査中の宴会は、親睦を深める良い機会である。中国人の大らかさ、社交性、ホスピタリティにはいつも敬服させられる。現地では協力者に調査手配などの一切を委ねることになるので、率直に感謝の気持ちを表現すべきだと思う。



写真2：農家調査風景（2006年8月、山東省青島市郊外）

宴会において最大の問題は独

身の飲酒文化であろう。中国の正式な宴席ではしばしば三〇〜六〇度の蒸留酒「白酒」が供されるが、相手とグラスを交わしてストレートで一気に飲みほす「乾杯」の習慣がある。中国の宴会での飲酒量は経験則からい

えば一般に南方より北方、都市より農村の方が多い。筆者の主なフィールドのひとつ山東省は礼を重んじ質実剛健を尊ぶ気風がある。飲酒習慣も前述の経験則を超越した豪快さがあり、他地域の中国人からも恐れられている（実際外国人の死亡事故も発生）。筆者も何度が修羅場を経験したが、酒量というより限界まで飲む正直さが評価される。山東省の伝統的な宴会の特徴を挙げると、主賓はホスト側の三人（二人の場合も）の主人と三、六、九杯ずつ乾杯する、強く乾杯を勧められる、酒量が先方に正確に記憶され次回も再現しなければ不誠実との誹りを免れない、等がある。昼の宴会も多く午後の調査に支障をきたす。北方農村をフィールドにする場合ある程度やむを得ないが、筆者は体のためにも食事の時間を外す、日系企業を通じて

手配する、などの飲まずに済む調査方法を模索中である。

山東省の例はやや特殊にせよ、伝統的な飲酒文化が残る地域では宴席での振る舞いはその人の資質を評価するための判断材料のひとつである。調査者である我々もじつくり観察されているのである。宴席での失態が許されるのは日本だけのこと、飲んでも節度を失わず、相手を楽ませようとする態度は好感を持たれるだろう。宴会は体を張った乾杯合戦になるため、酒量に自信があっても中国式の宴会に慣れない場合は最初から一切飲まないのが賢明である。

## ●その三 言葉の壁

広大な中国には各地に方言があり、広東語、上海語のように公用語（北京語）とは全く異なる言葉が多数存在する。北方方言は公用語に近いとはいえず、都市と農村、話者の年齢によって公用語からの乖離度は異なる。標準的な北京語しか解さない筆者にとつて、声調や発音の違いは致命的である。しばらく会話をすればある程度慣れるが、高齢者や農村住民となると調査効

率は極端に低下する。

筆者は山東省に一年滞在したが、農業省らしくどこことなく土の匂いのある山東訛りには随分悩まされたものである。農家数十人に対し聞き取りを行った時は、当方の質問は理解してもらえても回答を聞く段になるとしばしば問題が生じた。若年層や出稼ぎ経験のある人はほぼ問題なかったが、困難を極めたのは六〇代のほとんど村から出た経験のない人で、例えば息子の就職先が「成都」なのか「青島」なのかを判別することすら困難であった。調査には地元出身の研究者に同行願ひ、理解を助けてもらうことも多い。

なぜ敢えて障壁の多い中国農村をフィールドに？と聞かれることもある。中国農村が毎回新しい発見と刺激に満ちているという理由の他に、不確実な社会の中で人とのつながりを頼りに強く生きる人々の姿そのものが魅力的だからかもしれない。中国でよく「有縁分(ご縁がある)」という言葉を使うが、私が中国農村というフィールドに出会ったのも何かの縁としか言いようがない。